

ピアノ学習導入期の教授法と奏法についての考察

Consideration of teaching method and piano playing method
in the introductory period

深谷 悠里絵*

Yurie Fukaya

In order to play music, it is indispensable to face each other in the correct posture without putting a burden on the body. At the stage of starting the piano, I would like to think about how to use the body as well as the playing technique.

I would like to study the introductory materials and consider what kind of approach will lead to efficient lessons.

While many of the teaching materials published in Japan allow you to play the keyboard at the same time as reading the score, the introductory teaching materials in Russia and Finland were very interesting because they linked to basic physical usage and attitude toward the piano. .. We would like to compare it with the introductory teaching materials that have been handled in Japan so far, and also consider teaching methods for efficiently improving piano skills.

はじめに

本研究は、ピアノ学習の導入期において効率よくピアノ演奏技術を向上させていくためには、どのような指導法が必要なのか考察したものである。指導には「読譜」や「鍵盤を弾くこと」は欠かせないことであり、その部分に時間を要してしまい、ピアノを弾く姿勢、椅子の座り方、手首の使い方など、基本的な「身体の使い方」については、あまり時間をかけていない現状がある。

演奏家には体の痛みを抱えながら、腱鞘炎やジストニアなど故障と付き合いながら活動している人も多くいる。それも、姿勢や身体の使い方などが関係しており、故障を防ぐ方法も研究されている。ピアノを弾くための身体の使い方について、ピアニストでピアノ指導・教育者である、ジョルジ・シャンドールは次のように述べている。

「指が弱いせいで不均等かつ弱々しくしか弾けない、だからこそ辛くて退屈な指練習をしなければならないのだと、一般には考えられている。だが実際には、指だけでことを処理できるような正しいポジションに置かれていないせいで、指が不十分にしか機能できず、従っ

※ 幼児教育学科

て、より強い筋肉も作動することができないというのが本当のところなのである。要するに身体全体がコーディネートされていないのである。」¹

音楽を奏するためには、身体に負担をかけずに正しい姿勢で向き合っていくのが必要不可欠であるとする。

研究の背景

筆者は、幼児教育学科に所属しており、「保育表現技術 器楽Ⅰ」と「保育表現技術 器楽Ⅱ」を担当している。学生は90分の授業の中で45分ずつ個人レッスン、MLでグループでのアンサンブルのレッスンを受けている。器楽Ⅰの授業においては、ピアノ学習経験が浅い学生も在籍しており、レベルの差は大きい。また、経験があってもピアノに対して苦手意識を持つ学生は多く、実習などで幼稚園や保育園などの現場を体験し、ピアノ演奏技術について不安を感じている学生の様子も見受けられる。

本学ではレッスン教材として、「幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のためのピアノ・テキスト 改訂版 レッスン24とその応用」²を使用している。この教本は、初心者から経験者まで幅広く使用できるようにLessonごとに分かれており、中央のドから学習し、基礎的な知識を身に着けながら進めることも、進度に応じてピアノ経験者は応用曲に取り組むことも可能となっている。

1年間でLesson12まで弾けるようにすることが履修の条件となり、学生は目標に向かって取り組んでいる。前期の試験を終え、弾くことに一生懸命になり、ピアノ椅子の位置や姿勢などの基本的な取り組みが普段の練習から意識付けできていないということが明らかとなった。筆者は、レッスンではその都度指導されて正すことができて、日常的に身につけていないものは、緊張した環境であればあるほど実力として発揮することができないということを改めて実感した。

本論文ではこのような実情を踏まえて、導入教材を研究し、「身体の使い方」についてどのようなアプローチが効率の良いレッスンに結びついていくのか検討していきたい。幼児曲のように、かわいらしく短い曲であったとしても、ピアノを弾く際の重要な要素となってくるだろう。

ピアニストでピアノ指導者である、田中拓未氏(東京未来大学)は次のように述べている。

「左右の腕や指の動作を自由に操作するためにも、座った時に軸を持つことが重要である。歌の練習をする場合、子どもたちが楽しんでいる様子や、子どもたちが困難と感じていることを把握しなくてはならない。軸をもって座ることが演奏をより操作できることになり、部屋全体のことが視野に入るようになると考えられる。」³

保育者は、ピアノを弾くことだけではなくピアノを弾きながら子どもたちと一緒に歌ったり、子どもたちはどのような様子であるのか、常に意識を多方面に向けていかなければならない。ピアノを弾くことだけにならないよう、基本を踏まえたそれぞれの人に合った楽な姿勢を模索していきたい。

研究の方法

現在数多く出版されている導入教材の中で、3つの国の教材を取り上げて研究していく。筆者も子どものころから使用したことがあり、日本でも広く活用されている教材と、ロシアで出版され日本語訳された「ロシア奏法によるピアノ教本 はじめの一步」(2015)、フィンランドで出版され日本語訳された「スオミ・ピアノ・スクール」(2011)。これらの教材を比較し、それぞれの教材の特徴について検討していく。

また、ロシアではロシアンメソッドが確立され「ロシアピアノイズム」や「重量奏法」について注目されている。その奏法を活かしたロシアピアノ作品に取り組む際の奏法の留意点や気づきについても考察し、生徒の感想を交えながら考察した。

1. 日本の導入教材について

筆者も子どものころに愛用していた、日本で広く活用されている導入教材の多くは、「指番号を覚えて『ど』の音を覚えましょう。」「右手で『ど』の音を弾いてみましょう。」から始まる。その後、音符と鍵盤の表から、それぞれ位置を覚えて、中央のドから始まって、右手で(ド・レ・ミ)左手で(ド・シ・ラ)のように上下に1音ずつ広がっていく。譜読みを少しずつできるようにすると同時にメロディに対する打鍵法も一緒に進められていく。

このような導入教材を使用する子どもの多くは、4～6歳頃であり、まだ指の独立ができる年齢ではない。1の指だけ使う曲、1と2の指だけ使う曲までは楽しく、弾ける喜びを感じながら弾くことができる。しかし、3の指、4の指が出てくる曲になると、今まで順調に進んでいても、初めて難しさを感じる。1～3の指、1～4の指を続けて、さらにつなげて弾くのは大きな課題となる。

また、導入教材には歌詞がついていることが多く、歌って音程の違いに慣れてもらう、音の並びを感じる過程を経て、実際に鍵盤で弾いてみるという段階を踏んで進めていく。スラーや休符の取り方について、何度も歌って身に着けていくが、ピアノを実際に演奏すると、歌とピアノをしっかりと結び付けて、最初から歌ったようにピアノで弾ける子どもはいない。ピアノ初

心者の学生も、スラーで弾けるようになるには、ある程度時間をかけなければ難しく、苦勞している姿が見受けられる。

歌ではレガートで歌えたけれど、ピアノでは一音一音切って演奏してしまう。弾くことに一生懸命になってしまい、どのように演奏しているか気づかず、自分の音もよく聴くことができないことに原因があるのではないかと推察する。

歌った時のメロディを思い出して、例えば「○・○・○～○・○・○」と歌っていたか、「○○○～○○○～」とつなげて歌っていたか、どうだったか問いかけてみるとつなげて歌っていたことに気づく。その後で、歌っていた時と同じように弾いてみようかと促すと、レガートで弾こうとする。実際つなげて弾けるようになるまでには時間を要するが、レガートの弾き方だったか、そうではなかったか自分で気づくことができ、音をしっかり聞いて、隣の音同士をつなげて弾こうと考えながら演奏する。繰り返し取り組んでいくことで、言われなくともレガートで弾くほうが綺麗に聞こえて、耳も指もレガートを選択していくようになっていく。

また、最近の住宅の問題からピアノを家に所持している家庭は少なく、電子ピアノやキーボードが多いようである。そのため、軽いタッチで音が出てしまうキーボードで練習をしていて、異なる場所やレッスンでグランドピアノを弾くと鍵盤に重みを乗せてつなげて弾くという打鍵の感覚は、なかなかつかみにくいというものも現実にあるのではないかと感じている。

さらにここで課題となるのが指や手についてである。生徒は指の関節がへこんでしまう「まむし指」や手・指に必要な力が入り、こわばってしまうなど、導入期に手を丸くして弾くなどの指導は受けていても、具体的に脱力やレガートに弾くための体の使い方や奏法について触れることが少なかったため、問題点に初めて気づくタイミングとなる可能性もある。

本学で使用している「幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のためのピアノ・テキスト 改訂版 レッスン24とその応用」について

上述の通り、Lesson24までと応用〔そのⅠ〕参考曲と応用〔そのⅡ〕で構成されLesson 1ではオリエンテーションで「ピアノを弾く前に」

- ・ピアノをよく見てみましょう
- ・目をつぶって、ピアノにふれてみましょう
- ・音を出してみましょう
- ・ピアノの屋根(蓋)を開けて見てみましょう
- ・音を感じてみましょう
- ・リラックスしましょう

深呼吸しましょう・首をまわしましょう・手首をふりましょう・～(略)など

9つの項目でイラストを交えながら説明が書かれている。

ピアノを弾く前の準備(脱力)については書かれているが、姿勢やピアノを弾くときの体の使い方については書かれていない。

次のページからは、ねこの手(黒鍵弾き)やメロディを歌いながら鍵盤の音を探さぐり弾きなどが紹介され、楽譜についての解説と読譜の練習のページの後、Lesson 2から曲が始まっていく構成となっている。

実際、授業ではLesson 1のオリエンテーションについては、細かく説明する時間を取ることができないのが現状で、学生の進度に合わせて進められている。

2. ロシア(モスクワ)の導入教材について

「ロシア奏法によるピアノ教本 はじめの一步」では、1曲目は右手で単音「ソ」だけで始まり、2曲目は左手で「ド」、そして3曲目は両手で弾いていく。第1章は、すべて3の指の指先に腕全体の重さをかけながら上から滑らかに下ろすことに気をつけながら取り組む。その場合、「大切なのは、腕全体(手、手首、肘、肩)にアクティブで軽やかな弾力性を持たせること、弱々しい手でキーから音を引き出そうとしたり、手首を固くした粗いタッチになっていないかを確認すること」⁴、と注意書きされており、日本の最初の導入と大きな違いがあることがわかる。また、1音ずつ2分音符や符点2分音符で弾いていくため、しっかりと音を聞くこともできるようだ。第1章は、12曲からなっており、譜読みを中心とせず、奏法から始まることもロシアの教材の大きな特徴ではないかと感じる。

第2章では、楽譜を見ながらピアノを弾くことを課題とし、子どもが集中して音を正しく引き出せるように工夫された章となっている。いろいろな音が出てきても、3の指で弾くことは第1章から変わらずに進んでいく。

第3章になると、2・3・4の指、第4章では1～5全ての指を使っていく。

1巻で全ての指を使って、重音を鳴らせるように導かれ、手の甲をアーチ型に固めて演奏することも自然と身に着けることができるよう構成されている。

2巻に進むと、レガートやスタッカートといった奏法に入るが、1巻でやっていた3の指に重みを乗せて引くところから始まり、右手から左手へ、左手から右手へ、と移行するレガートから取り組んでいくため、指に負担がかかることもレガート奏法が難しいと感じることもなく、スムーズに取り組むことができるよう構成されている。

3. フィンランドの教材について

「スオミ・ピアノ・スクール」⁵では、「音楽への旅立ち」の後に1巻・2巻と構成されている。「音楽への旅立ち」について、具体的にイラストを交えて文章とともに基本的な姿勢から記号まで紹介されているため、項目ごとに表でまとめてみる。(表1)

1巻、2巻についても同じように項目ごとにまとめていくが(表2、表3)、曲も増えていくため、奏法についてや音楽理論の内容、ペダルなどの演奏技術について限定して取り上げる。

また、実際は子どもたちが読めるようにすべてひらがなで目次も書かれているが、ここでは簡潔にまとめるため漢字に変換して記載する。

「音楽への旅立ち」から1・2巻全てにおいて学ぶ生徒も、指導をする先生も使いやすい内容となっている。

4. 日本の教材とロシアの教材、フィンランドの教材について

これまで考察してきた教材を比較していくと、導入教材のはじまりは、5線譜と鍵盤の位置を一致させながら右手・左手それぞれ上下に1音ずつ広げて、譜読みを一緒に進めていくものが多い中、今回取り上げたロシアの教材は、鍵盤への重みのかけ方を確認しながら奏法を中心に進めていく。またフィンランドの教材は導入期にピアノを弾くための基本的な姿勢や手首の使い方、リズムやスタッカート、記号やフレージングなど各項目ごとにイラストを交えてわかりやすく展開されていて、最初の段階で大きな違いがあることがわかる。

また、今まで筆者が使用してきた教材は、どんなことに注意して演奏するのか書かれていない教材もあり、指導者側がどのようにしたら表現できるのか、この音型ではこの弾き方を身に着けたいなど、その子にあった指導が求められると推察する。

ロシアの教材は、各章ごとに指示があり、どんなことに注意し、どんなことが身につけていくか書かれている。

フィンランドの教材は、子どもが読んでも理解しやすい言葉で書かれていて、巻末には指導者への解説が書かれており、指導するときのポイントやどこを重点的に指導すると良いかなども書かれていて、ロシアもフィンランドもそれぞれの国でアプローチの仕方は、大きな違いがあることがわかった。

5. ロシアピアノリズム、重力奏法について

ロシアの導入教材を研究していく中で、それらは近年注目されている、ロシアピアノリズムと

ピアノ学習導入期の教授法と奏法についての考察

表1

目次	具体的な内容
生徒と先生の名前	
自分の手	自分の手を置いて今の大きさを知る。指番号を書いて指の名前を知る。
ピアノをよく見ましょう	グランドピアノとアップライトピアノの絵とともに、鍵盤やペダル、譜面台などの名前が書かれている。またハンマーの絵もどのように音が鳴るのか紹介できる。
よく聴きましょう	1つ前のページで覚えた、弦や鍵盤を弾いてみてどんな音が鳴るのか知る。
おや、いろいろな音が聞こえますね！	雷や風、川が流れていたり、カエルが水に飛び込むなど身近にある音を絵から想像する。
弾く姿勢	うさぎのイラストとともに、良い姿勢・悪い姿勢、椅子の高さについて書かれている。
手	手は脱力すると体の両脇に垂れ下がり自分の手がどのようになっているか、両手の指先を合わせると何を感じるか、その後鍵盤を弾くとどんな感じがするか。
黒鍵を弾きましょう	
オクターブ	鍵盤の絵とドイツ語音名の紹介
作業のページ	
鍵盤	黒鍵・白鍵の紹介 握りこぶしの形で弾いてみる(跳ねているうさちゃんのように・くまさんが歩くように・蝶々のように)
上へ下へ	5度の音階を上ったり下ったり、簡単な歌を歌いながら音階を感じていく。
上るよトントン	嬉しい・悲しい・日本風に・アラビア風になどいろいろな音を使って音階を紹介
演奏	レガートについて2と3の指2～4の指を使ってイラストとともに、指・手首の使い方について
5線	線と間について 線の上、線と線の間に音符を書いてみよう
音部記号	ト音記号・ヘ音記号について
線の上と線の間の音符	ト音記号のソ・ミ・ド、ヘ音記号ファ・ラ・ドの線の上の音、ト音記号ラ・ファ・ド、ヘ音記号ミ・ソ・シの線の間の音を使って4小節の曲を弾いてみる(先生の伴奏パート有)
リズムスコア	音符の部分の名前、拍子記号、小節線について
作業のページⅡ	全音符・2分音符・4分音符を書いてみよう
拍子記号	4分の2拍子、3拍子、4拍子について アクセントの重要性について
休符	4分休符・2分休符について
音階	2オクターブの範囲を使って音符への理解
リズムの家	これまで習った、音符・休符がまとめられている
音の大きさ	クレッシェンド・ディミヌエンドについて
スタッカート	
フレージング	2音のスラーの場合、どのような手首の使い方をすればよいのか、重さを置く部分について
臨時記号	フラット・ナチュラル・シャープについて 名前と意味
8分音符	
親指が手の下へ	親指をくぐらせたり、飛び越えたりする練習
音階	ハ長調・イ短調の音階
音程	2度・3度・4度・5度の音程について
耳を澄まして	1つ前のページで覚えた、音程について実際にピアノを弾いて響きを感じる
解説	全ての目次項目について(曲も含む)、どのような声かけでレッスンを展開していくと良いのか指導方法が書かれている

ピアノ学習導入期の教授法と奏法についての考察

表2

目次	具体的な内容
リピート	繰り返し記号について
腕の力を抜きましょう	脱力について
音符と休符の長さ	円を用いて、全音符を基準として何等分すると何音符になるのか視覚的にもわかりやすく
音階	4オクターブの音階が鍵盤とともに書かれているので、曲中に新しい音が出てきたらこのページに戻ってみられるようになっている。
音階練習	
音程	1度から7度の音程について
重音をレガートに弾きましょう	1から5の全ての指を使って
半音上がった音／半音下がった音	CDEFGAHドイツ語読みで#やbがつくとどう読み方が変化するのか
三和音	Iの和音からVIIの和音まで 転回形について
和音練習	様々な調を使って
ペダル	ペダルの踏み方、踏みかえるタイミング
いろいろなタッチをよく聴きましょう	どんな音で弾きたいか、どんな音が鳴っているか考える
音階(長調・短調)	
三和音とカデンツ(長調・短調)	
和音記号	コードについて
和音の応用	和音をバラバラにして伴奏にどのように活かしていくか
楽語	楽語の読み方や意味
先生方へ解説	「音楽への旅立ち」と同じ

表3

目次	具体的な内容
練習方法	音楽への旅立ちから1巻で学んだことを踏まえて、基本的な姿勢の見直しやどんなことに注意して練習すると良いかなど
復習	1巻までに学んだ和音の転回形、拍子記号、リズム、レガートの弾き方等
ピアノ演奏のためのトレーニング	脱力の練習の仕方、レガート奏法について、速い演奏について
音程	短、長、減、増、完全の音程について
装飾記号	モルデント、トリル、ターンについて
自由な伴奏と即興演奏	今まで学んだことを活かして、メロディーに主要和音などを考えながら伴奏をつけていく
音階、アルペッジョ	様々な調について
楽語	楽語の名前と意味について
解説	「音楽への旅立ち」と同じ

重量奏法につながっていくように構成されているのではと解釈し、ここで取り上げてみる。

参考文献から、ロシアピアノニズム、重力奏法についての特徴は、

- ・椅子が高いこと
- ・鍵盤に対して垂直に指を下ろすこと
- ・鍵盤の底までは指を下ろさない打鍵で下部雑音がなくピアノ本来の豊かな響きを求めて鳴らすこと
- ・打鍵をするときに手首と手の甲を真っすぐになるように構えること

以上のことが挙げられており、これらは筋肉の使い方に沿った演奏法になるため、体の負担が減るということにつながり、演奏者にとって注目しておきたい重要な特徴である。

これらを踏まえて、実際に演奏してみて、また演奏する生徒の様子を見て感じたことは、まず一番取り組みやすかった椅子の高さの調整をして、鍵盤を上からとらえることができるため、音に深みが増し、さらに和音で動く部分もとらえやすくなったと感想が挙がっている。今回、この体験で感想を寄せてくれた人は元々椅子が低く、手首も下がりぎみで手の甲が固くなっていた弾き方だったため、大きな変化を感じる事ができたようだ。

椅子の高さを調整するだけで、特徴のほとんどの項目に対応でき弾き方が改善されていることが実感できている。

しかし、小学校低学年の子どもにも体験してもらおうと、椅子と手首の位置が以前より高くなり、打鍵をする際、腕の重さをかけて鳴らす感覚が調整できなかつたため、和音を鳴らした時の響きが薄れてしまうように感じた。大人や経験のある人は、変化に対応しながら調整して進めていけるが、子どもやピアノをはじめてからの期間が短い人にとっては、いろいろな段階を踏んで身に付けていくことが大切であると痛感した。

日本のピアノ教育は、一般的に鍵盤の底までしっかりタッチをすることが推奨されているため、ここでも奏法の違いがあり、自分に合った奏法、生徒に合った奏法を選択していくことも重要な課題である。

6. ロシアピアノ作品に取り組む際の奏法の留意点と気づき

ここで、実際にレッスンでチャイコフスキーのピアノ曲を取り扱い、奏法や弾き方を確認して感じたこと、生徒の感想等をまとめていく。

チャイコフスキー作曲こどものためのアルバムより「ひばりの歌」を取り上げる。

(譜例)

この曲は、スラーとスタッカートで組み合わせられた音型が多く用いられ、ひばりの鳴き声のよ

うなメロディが特徴である。

生徒Aは、手首が下がりがちで手指や手の甲を上手に使用せず、跳躍のある曲や、スタッカート・スラーなどアーティキュレーションへの対応に苦戦していた。以前、某音楽教室でピアノを習っていて、エレクトーンやキーボードで練習していることが多く、椅子の高さ、手首の位置、タッチについてピアノを弾くうえでの基礎的な姿勢について見直しが必要であったため、この曲を選択し取り組むこととした。

譜読みを終え、弾いている様子を見ていると、スラーやスタッカートが繰り返される部分の弾き方に苦勞しているようだった。

これまで取り組んだ曲でも上述のように、手は鍵盤と近く、手首が下がっているような弾き方だったため、少しテンポの速い曲を弾くと隣同士の音が重なってしまい、リズムが崩れてしまうことがあった。そこでまず初めに姿勢・手の形の見直しを行った。

見直しを行っていくうえで大きな変化を感じたのはやはり椅子の高さ(姿勢の見直し)の調整だった。前の人が使った椅子の高さが、低くても高くても気にしないで弾いていたため、その時座っていた高さより少し上げて弾いてみるよう促した。すると、自然に腕や手首の角度が上がり、鍵盤を以前より上からとらえることができたこと、スラーで弾いた後、スタッカートで弾く音型も腕や肘と手首の使い方に一連の流れができたことに違いがあらわれた。

最初は、腕や手首の使い方に慣れるまでは時間を要したが、感覚をつかんでからは繰り返し出てくるスラーやスタッカートにも対応することができ、円を描くように自然にその音型が弾けるようになっていった。

写真1.は椅子の高さを変える前、写真2.が変えた後のものである。

目に見える変化と、技術的な変化があったが、生徒Aからも以下のような改善されたことを実感する感想を聞くことができた。「椅子の高さや姿勢を見直すことで鍵盤の全体を見られるようになり、上から構えられるようになったので自由に手が動くようになって、いつもより弾きやすかった」

本学学生にも椅子の座り方、姿勢について見直しが必要な学生がいるため、今回の例のように弾きやすさの変化まで結びつくかは不確定ではあるが、基本的な姿勢について指導していく必要があるように感じた。

また、以前福島大学の音楽を学んでいる学生を対象に奏法の研究をした際、ピアノの姿勢についてアンケート調査を実施したことがあったが、椅子の高さについて自分に合った同じ高さに決めている人は全体の3分の1にしかならないことが結果に出たこともあり、今回の研究を通して、改めてピアノを弾くときの姿勢について、どれだけ影響が出てくるのか考察を続けていく必要があると考える。

世界でピアノ奏法が確立され、注目されているのは上記のロシアピアノリズムと重量奏法であ

る。世界的に有名なショパン国際ピアノコンクールにおいても、優勝者は第1回目(1927)から第17回目(2015)までで、ロシア出身の参加者が1番多く、17回中7回の優勝者もしくは1位なしの2位(最高位)を輩出している。(表4)

また、2010年は1位、2位、3位がロシア人であった。これは教師から生徒へ代々継承されている奏法が結果として表れているといえるだろう。世界3大音楽院の一つでもあるモスクワ音楽院には世界から多くの留学生や指導者が集まっている。

奏法が確立され、それが自然と演奏の技術の向上・結果へつながっていくと考えると、生徒や学生への指導方法の見直し・検討も必要だが、自分自身の奏法の改善、技術向上の一歩として取り組み、ピアノ奏法の研究を深めていきたい課題となった。

Song of the Lark

ひばりの歌

Lentamente

(譜例) 全音楽譜出版社



写真1



写真2

表4

	優勝者(出身国)
第1回	レフ・オポーリン(ロシア)
第2回	アレキサンダー・ウニンスキー(ロシア)
第3回	ヤコフ・ザーク(ロシア)
第4回	ハリーナ・チェルニー＝ステファンスカ(ポーランド)
第5回	アダム・ハラシェヴィチ(ポーランド)
第6回	マウリツィオ・ポリーニ(イタリア)
第7回	マルタ・アルゲリッチ(アルゼンチン)
第8回	ギャリック・オールソン(アメリカ)
第9回	クリスティアン・ツィメルマン(ポーランド)
第10回	ダン・タイ・ソン(ベトナム)
第11回	スタニスラフ・ブーニン(ロシア)
第12回	無 第2位(ロシア)
第13回	無 第2位(ロシア)
第14回	ユンディ・リ(中国)
第15回	ラファウ・ブレハッチ(ポーランド)
第16回	ユリアンナ・アヴデーエワ(ロシア)
第17回	チェ・ソンジン(韓国)

7. 最後に

以上のことから、どの国の教材が良いとは一概に述べることはできないが、今回の研究を通して、ロシアとフィンランドの教材にしかない良さを知り、最初から異国教材のアプローチの仕方でも指導していったらどのようなようになっていくか、導入の部分から指導して変わっていく生徒の姿も研究していきたいと感じた。これらを幼児教育学科の授業時間の中で異国のメソッドを現段階で導入することは難しいだろう。しかし、全てを取り入れるのは不可能でも、更に研究を深め部分的に活用していけたらより良い指導に繋がるのではないかと考える。

これまでは教材を進めていくと、記号や楽語、スタッカートやスラーなどの弾き方について、もう少し早い段階で時間をかけて指導しておきたかったと振り返る機会が多くあったが、その時は譜読みや演奏のほうに時間をかけていて後回しとなっていた。フィンランドの教材では、導入期からイラストを用いて視覚的にもわかりやすく簡単に説明されており、短い集中力の子どもでも1ページごとに基本的な姿勢から音楽理論まで学んでいくことができる内容となっていた。

限られた時間の中で何を優先してレッスンするか、身体の使い方についてはもう少し成長してからにしようと思ってしまうことも多い現状ではあるが、気が付いた時には癖がつ

いてしまい、それらを直すのに多くの時間がかかってしまう。また身体の様々な部分に故障や不調が出てきて初めて気づき、手遅れとなってしまうこともあるかもしれない。どんな練習でも反復して取り組んでいくように、毎週のレッスンで身体の使い方を見直す時間はとても重要なことではないだろうか。

ピアノを始める時期によって、子どもや大人で身体の状態は異なるが、ピアノを弾く姿勢、その人に合った椅子の高さを考えていくことは基本的に同じであるため、「読譜」と「演奏技術を高める」学習と同じように、「身体の使い方」についても年齢に合わせた言葉で伝えていくことで、学習者それぞれに合った自然な使い方が身についていくことを目指していきたい。

〈付記〉

本稿は演奏表現学会(2019年10月)例会において、口頭発表を行った内容を基に加筆修正したものである。

引用文献

- 1 ジョルジ・シャンドール：シャンドールピアノ教本 身体・音・表現 春秋社 2005年
監訳：岡田暁生 共訳：佐野仁美・大久保賢・大地宏子・小石かつら・筒井はる香
- 2 幼稚園教諭・小学校教諭・保育士養成課程のためのピアノ・テキスト 改訂版
レッスン24とその応用 ドレミ楽譜出版社 2017年
発行者：山下浩 編著者：ピアノ・テキスト編集委員会
- 3 田中拓未：ピアノ学習者の演奏姿勢について一軸を意識した座り方に関する考察—
東京未来大学研究紀要2010年第3号
- 4 O.ゲターロワ/I.ヴィーズナヤ：ロシア奏法によるピアノ教本 はじめの一步
音楽之友社 2016年 訳：村手静子
- 5 リトヴァ・レヒテラ/アニヤ・サーリ/エーヴァ・サルマントーネウヴォネン：
スオミ・ピアノ・スクール「音楽への旅立ち」、スオミ・ピアノ・スクール1、2
1996年 監修：館野泉 訳・編：坂井百合子・久保春代

参考文献

- 1 ジョルジ・シャンドール：シャンドールピアノ教本 身体・音・表現
監訳：岡田暁生 共訳：佐野仁美・大久保賢・大地宏子・小石かつら・筒井はる香
春秋社 2005年
- 2 ジェラルド・クリックスタイン：成功する音楽家の新習慣 練習・本番・身体の戦略的ガイド
監修：古屋晋一 訳：藤村奈緒美 ヤマハミュージックメディア 2018年
- 3 マリナ・フェレイラ：ピアニストの筋肉と奏法
医療監修：酒井直隆 訳：八重樫克彦・八重樫由貴子 音楽之友社 2015年

- 4 中嶋恵美子：知っておきたい幼児の特性 ピアノ・レッスン「なぜ、わからないの？」と悩む前に 2016年 コラム執筆：小野寺敦子 音楽之友社
- 5 大野真嗣：「響き」に革命を引き起こす ロシアピアノニズム ヤマハ 2019年
- 6 原田英代：ロシア・ピアノニズムの贈り物 みすず書房 2014年
- 7 佐藤泰一：ロシアピアノニズム ヤングトゥリー・プレス 2006年
- 8 田丸信明：びあのどりーむ Gakken 1993年
- 9 高橋正夫：みんなのオルガン・ピアノの本 ヤマハ 1957年
- 10 樹原涼子：ピアノランド 音楽之友社 1991年
- 11 呉暁：うたとピアノの絵本 音楽之友社 1989年
- 12 トーマス・マーク、ロバータ・ゲイリー、トム・マイルズ：『ピアニストならだれでも知っておきたい「からだ」のこと』
監訳：小野ひとみ 訳：古屋晋一 春秋社 2006年
- 13 大熊直子/川井弘子：「ピアノ奏法における『ボディ・マップ』の有効性の研究～腱鞘炎の回復とショパン『前奏曲』演奏～」『吉備国際大学社会福祉学部社会福祉学科』2005年
- 14 石井ゆりこ：『演奏者のためのはじめてのアレクサンダー・テクニーク 身体を使うのが楽になる』ヤマハミュージックメディア 2014年
- 15 バーバラ・コナブル著：『音楽家ならだれでも知っておきたい「からだ」のことアレクサンダー・テクニークとボディ・マッピング』 訳：片桐ユズル・小野ひとみ 誠信書房 2000年
- 16 酒井直隆：『ピアノを弾く手 ピアニストの手の障害から現代奏法まで』 音楽之友社 2012年
- 17 中野研也：保育者に求められる音楽スキルとピアノ教育・音楽教材との関連 - 子供のための音楽のあり方を考える 仁愛大学研究紀要 人間生活学部篇 第10号2019年
- 18 辻浩美・田中麻衣・鹿戸一範：子どもの音楽的感性を高める指導を目指して—保育士・幼稚園教諭採用試験のピアノ実技を基に— 小池学園研究紀要 No.16 2018年
- 19 松本明：幼児教育学生のピアノ演奏技能向上についての考察 川村学園女子大学研究紀要 第28巻 第3号 2017年